

【優秀賞】

水で繋がる命

石巻市立石巻中学校

三年 濱^{はま} 名^な 幸^{ゆき} 音^ね

「地震！」

母の言葉に家族の和やかな時間が一瞬で緊張した雰囲気になりました。新しい年を迎えた夕方、お正月のお祝い空気の中、茶の間で小さな揺れを感じました。そしてそのすぐ後、テレビから流れたニュースに私は言葉を失いました。令和六年一月一日十六時十分頃、石川県能登地方を最大震度七の地震が襲ったのです。

ほどなく日本海沿岸に大津波警報が発表されると家族の顔色が変わりました。東日本大震災で津波がもたらした甚大な被害が蘇っているのだろうと思いました。私は当時一歳で記憶が全くないのですが、家族や学校の先生から当時の出来事や体験を聞いてその恐ろしさは知っていたつもりでした。しかし、能登半島地震発生後、日を追うごとに明らかになってくる被害の大きさは私の想像をはるかに超えるものでした。

能登半島地震で観測された津波は輪島港で一・二メートル以上。一部の沿岸部で残念ながら住宅被害が出たそうです。東日本大震災で観測された津波は福島県相馬で九・三メートル以上。石巻市の鮎川で七・六メートル以上。女川漁港では何と十四・八メートルの津波痕跡も確認されているそうです。私の身長は一・六メートル。その何倍もの高さの水がものすごい勢いで自分に向かってきたらと思うと足がすくむ思いです。母は女川町を襲った津波で尊敬する友人を失ったそうです。大好きだった故郷の海や川を憎んでしまいたくなったと話していました。

能登では建物が倒壊し、大規模火災も発生しました。そして、多くのけが人が手当てを必要としていました。政府は非常災害対策本部を設置し、

警察や消防、自衛隊、海上保安庁を中心に、懸命の救命、救助活動に当たったそうです。その際に「水」は、火を消し、手当てや救助などの全ての活動に欠かすことのできない重要な役割を担っていました。私は、被災者の命を救う全てのことにより「水」が深く関わっていることを知り、水は姿を変えて多くの大切なものを飲み込んでしまうこともある、恐ろしい存在であると同時に、私たちの命を繋ぎ、生きていく上で欠かせない存在でもあるということを感じました。

連日、能登の被災地での様子がテレビに映し出される中、どれだけ日々の「普通」の暮らしの中で水が重要なかがよく分かりました。お風呂やトイレ、飲料水の確保。更には人工透析などの医療には不可欠で、乳幼児や高齢者などの衛生環境を守る上でもなくてはならないのが水です。さらに詳しく調べてみると、普段何気なく使用している水の量は一人当たり一日約二百三十リットルで、牛乳パック二百三十本分の量の水を当たり前のように使用していたことを知り驚きました。蛇口からきれいな水が流れる今の日本では必要な分の水をもしかしたら必要以上に毎日何気なく使っていて、その重要性を考えることもなかったことを反省しました。

元日に発生した能登半島地震が水資源の大切さについて深く考えるきっかけとなり、中学三年生の私にもできることがたくさんあると気付くことができました。日々の暮らしの中でシャワー使用時や手を洗う時、歯磨きなどの際に流しっぱなしにせずには水を心がけること。水源である山や川、美しく豊かな自然を守り続けること。そして、東日本大震災を経験した身近な人たちから学んだことを生かし、雨水の利用や自然災害への備えができるようになりたいと思います。

水は私たちの命を守る重要なものであり、その限りある資源を大切に活用し、今回学んだことをしっかりと未来に繋げていける大人になりたいと思います。